

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

タイトル：「東南アジアのイスラームと文化多様性に関する学際的研究（第2期）」2015年度第3回研究会

日時：2016年2月21日（日）14：00～19：00

場所：AA研304号室

内容

研究会では、計3編の報告及び質疑応答が行われた。報告及び議論は、報告1、2が日本語、報告3は英語で行われた。最初の2編はいずれも共同研究員による報告であった。奥島報告はボルネオ島のマレーシア・インドネシア・フィリピンの国境地域の多民族の社会状況と国家の関係を論じたもので、言語グループと民族との関係や現在の王権と観光振興とのかかわりなどについて質問がなされた。小河報告は南タイのムスリム村落における津波災害後のイスラーム団体とキリスト教団体の援助活動にともなう変化を扱ったもので、タイにおけるキリスト教の位置づけや住民の関心、タイのイスラームのなかの当該団体の位置づけなどについて質問がなされた。報告3では、ゲストスピーカーとしてインドネシア科学院(京都大学東南アジア研究所に招聘研究員として滞在中)のAhmad Najib Bruhani氏にインドネシアのイスラームについてお話しいただいた。国際的な反イスラームの動きやスンニ・シーア関係、LGBTなど、現在のイスラームをめぐる世界的な課題に対するインドネシアのムスリムの認識について質問が出された。各報告の要旨は以下のとおりである。

報告要旨

【報告1】

「国境紛争に翻弄されるエスニシティ～ボルネオ島ティドン族の経験から～」

奥島美夏（天理大学／AA研共同研究員）

東南アジアにおける領土・境域をめぐる紛争は、東西冷戦終了後も天然資源獲得競争の激化に伴い、むしろ頻発・再燃する傾向にある。特に、海底資源を有する東南アジア島嶼部では、南沙諸島問題をはじめマレーシア、フィリピン、インドネシア、シンガポールなどの国境に位置する島々の領有権が争われ、デン・ハーグ国際司法裁判所における審議・判決を経てもなお、抗議や軍事的示威行動が後を絶たない。

こうした国境紛争では、まず現在から植民地時代、そしてそれ以前にさかのぼる各種条約・協定・地図などの正当性から権原の所在を吟味するが、歴史資料が少なく、また国境

決定や領土割譲・併合の過程が複雑な東南アジア島嶼部の場合、現地社会の所蔵する文書や系図、伝承、先祖の海外渡航や蓄財の記録なども、実効支配の規模・深度をはかる物証として調査・審議対象となってきた。本報告では、それらのケースから、現マレーシア・サバ州北東岸のマレーシア・フィリピン・インドネシア国境地域をめぐる係争をとりあげ、植民地時代後半から現代国家成立期にかけて、同地の紛争・暴力に巻き込まれ続けてきた現地少数民族ティドン（ブルンガン・マレー、その他カヤン・ムルトなどの関連民族も含む）の経験を紹介した（一部は奥島 2002、2004、2007 などですでに刊行）。

サバ州をめぐるのは、18 世紀に同地をブルネイから割譲され、一貫して領有権を保持してきたと主張するフィリピン南部のスールー王族と、国民投票でマレーシア連邦への合流を選んだサバ州が 1980～2008 年に争った。さらに、サバ州とインドネシア東カリマンタン州の国境地域に 18 世紀末から台頭したブルンガン王族が、サバ南東部のシパダン・リギタン 2 島を支配していたとして、インドネシアもマレーシアと 1996～2002 年にかけて国際裁判で争い、途中からフィリピンも参加した。各国政府は必ずしも同地に関心がある訳ではなかったが、資源確保や外交戦略上の必要からこれらの地元民を支援した。

政府の協力依頼を受けた各王族の末裔は、植民地時代のロイヤルティや土地使用権などの返還、ないし官職や起業機会を期待した。インドネシアでは、2000 年の地方分権化実施で、観光政策や学校教育においても地域言語・芸能文化がとりあげられ、王族・貴族・首長（族長）などの政府委託事業や国際会議への招聘なども増えている。だが、国際裁判に決定的な証拠を提示するに至ったケースはほとんどなく、各国の裁判関連費をいたずらに消費し、また親族との軋轢や系図・伝承の改竄など地元社会への悪影響をももたらした。なお、同様のケースは、マレーシアとシンガポールの間で争われたペドラ・ブランカ（パトゥ・プティ）島の係争でもみられ、マレーシア政府がシンガポールのマレー王族関係者が国外から財産分与要求するのを報道・支援し、シンガポール政府がグラム王宮を接收して牽制している。

ブルンガン王族の場合、ボルネオ先住民族ムルト系諸民族の中でも、沿岸部に早くから進出してイスラーム化したティドンが母体となり、ブルネイやクタイ、スールーなどの王国と通婚関係もあった。だが、ブルンガンとタラカン島に分立した王族が対立するようになったほか、ブルンガンでは戦闘能力・組織力が高いカヤン系諸族との通婚同盟を活用して内陸の平定を進め、スールーやバンジャルマシンなど他の周辺イスラーム王国に対抗した。こうした経緯から、ブルンガンは「ティドンでもスールーでもない」と独自の系統を主張し、マレーシアはインドネシアとの係争中は「ブルンガンもティドンも所詮はインドネシアからの移民で、サバ州はスールー王国の勢力圏」、だが 2013 年の「スールー王国軍」の銃撃戦以降は「ティドンやブルンガンはボルネオ先住民族で、スールーより早くから定住していた」などと政治的言説を翻している現状である。国際裁判によるこうした風潮は近年のものであるとはいえ、地元の本来の伝承や系図、文書などが次世代に受け継がれず損なわれていく危険性に対して、有識者は研究蓄積とその社会還元をますます急ぐととも

に、国家のイデオロギーや外交問題とは離れた中立的な知識の確立こそが重要である、という現地教育にも力を入れることが課題となっている。

【報告 2】

2つの宗教団体が生み出す新たな関係性—タイ南部ムスリム村落におけるタブリーグとワールド・ビジョンの支援活動に焦点を当てて—
小河久志（常葉大学／AA 研共同研究員）

本発表は、タイ南部のインド洋津波被災地を事例に、異なる宗教を基盤とする2つの国際団体の支援活動を通して多様な理念や実践が交錯するなか、人々がいかにそれに対応したのか、その錯綜した様相を紐解いた。具体的には、イスラーム系団体のタブリーギー・ジャマーアト (Tablighi Jama' at 以下、TJ) とキリスト教系団体のワールド・ビジョン (World Vision 以下、WV) を取り上げ、それぞれの支援活動の中身、支援活動への住民の対応、支援活動が被災地社会に与えた影響の実態を描き出し分析を加えた。その際、時間を津波前と津波後に分けて比較を試みた。

まず、本発表で取り上げたのが、2つの宗教団体の関係である。確かに WV と TJ は、津波前後のいずれの時期においても個別に活動しており、両者が直接関係を持つことはなかった。しかし、各団体の津波後の活動内容に注目すると、両者のあいだに「補完」と呼べる関係が存在していることがわかった。WV は漁具をはじめとする物的な支援、TJ は住民の心理的な支援を行った。両団体の関係者は指摘しなかったが、活動内容とそれに対する住民の評価を勘案すると、WV と TJ の支援活動が、相互に補完するかたちで物心両面において住民を支援していたことが理解できる。この「意図せざる補完」により、TJ と WV による支援活動は、多くの不備を露呈した行政による支援活動の欠落部分を埋めることに成功した。

続いて取り上げたのが、2つの宗教団体の支援活動をめぐる住民の対応の差異とその変化である。津波前の TJ の支援活動は、コアメンバーの少なさや反対者の存在といった問題を抱えていたものの、公的宗教機関との連携もあり住民に広く受け入れられていた。こうした状況は、コアメンバーの増加や反対者の減少というかたちで津波後、更なる広がりを見せていた。津波という新たな災厄の出現と津波への不安の高まりという状況の下で、TJ の支援活動が住民の不安の解消に寄与したことがその背景にあったと言える。TJ の支援活動をめぐる住民の対応の変化は、住民がこれまで以上にイスラームの教えを意識化し日常生活において実践するようになったという意味において、再イスラーム化の進展ととらえることができる。

他方で、WV の支援活動をめぐる住民の対応は、津波の前後で劇的に変わった。津波前に WV が M 村で行った井戸掘り支援は、WV がキリスト教系の団体であることを理由に住民

に受け入れられなかった。しかし、この状況は津波後一変した。WV は津波後、日用品等の物資の支給をはじめとする支援活動を行ったが、それが住民に広く受け入れられ、かつ高く評価されたのである。では、WV の支援活動が、いずれも事前に住民のニーズを把握した上で行われたにも関わらず、なぜ津波の前後で住民は正反対の態度をとったのだろうか。この「逆転現象」の発生は、先の TJ 同様、津波後の村社会の混乱が引き金になったことは疑いを得ない。とくに、行政をはじめとする他の諸アクターが行った支援活動が、住民のニーズから乖離したり、不正な分配が行われたりするなどの問題を抱えていたこと、他方で WV の支援活動がそれとは無縁であり、かつ他のアクターによる支援の穴を埋める役割を果たしたことは無視できない。

以上のように、TJ と WV の支援活動に対する住民の態度は、津波の前後で大きく変化していた。津波前は、イスラーム系団体である TJ の活動をその初期から着実に受容する一方、WV の活動を WV がキリスト教系であるがゆえに拒絶した。つまり、津波前の M 村では、NGO の基盤にある宗教の違いが、NGO の活動をめぐる住民の対応のあり様に影響を与えていたのである。それが津波後、TJ だけでなく WV の支援活動も広く住民に受け入れられたということは、宗教の違いが津波前と比べて意識されなくなったことを示している。それは、困窮する人々を救済するという WV の考えが、宗教の違いを超えて受け入れられたと換言することができるだろう。

発表者が長期のフィールドワークを終えた後、M 村では、低迷する経済の活性化を目的に、行政主導による観光開発が始められた。その結果、非ムスリムの外部資本によって宿泊施設や飲食店といった観光関連施設が村内に作られ、村を訪れる非ムスリムが急増している。また、キリスト教徒である WV のスタッフと住民の関係も深まりつつある。WV のスタッフと家族ぐるみの付き合いをする住民や、WV のスタッフが斡旋した村外の職場で働く住民が現れたことは、そのことをあらわしている。こうしたなか、宗教の壁を超える動きが、信仰をはじめとする住民の日常に今後いかなる影響を与えるのか、再イスラーム化の動きと併せてその動向を注視していきたい。

【報告 3】

Diverse Islamic Trends and the Construction of Orthodoxy in Indonesia

Ahmad Najib Burhani (*CSEAS Kyoto University / Indonesian Institute of Science (LIPI), Jakarta*)

Globalization has brought with it a number of challenges for moderate Muslim community, mostly represented by Muhammadiyah and Nahdlatul Ulama (NU), in promoting tolerance and preserving religious diversity in Indonesia. With the flow of ideas about Islamic caliphate, radicalism, and exclusivism promoted transnational groups such as Hizbut Tahrir and Islamic State of Syria and Iraq (ISIS); with the

objectification of religious identity and the effort to consolidate or strengthen boundaries of certain religious identity; and with the spread and rise of religious conservatism and radicalism promoted by such groups as the Front of Defenders of Islam (FPI), do these moderate Muslims still able to shield their community from these flowing ideas? Do they have any programs as an alternative discourse to counter the narrative about Islamic radicalism? What are their efforts to steer and bring back the *umma* into tolerant and smiling Islam? If they have any, what kind of methods and strategies utilized by the moderate Muslims to block the influences of radical Islam within their organizations and in Indonesia in general? This study intends to answer the mentioned questions by, first, elaborating the position of Indonesian Islam in Muslim world. Second, it will explain the diversity of religion in Indonesia, including those who have been considered as minorities. Third, it will describe the challenges of peaceful Islam by explaining the threat of conservatism, transnationalism, radicalism, and terrorism. And lastly, it will describe and analyze the efforts of Muhammadiyah and NU in constructing paradigm of Islamic peaceful mindset and trying to win consent of people in this religious perspective.

以上